

第216回 「元気に百歳」クラブ「道草」句会開催

12月、本年も間もなく終了します。基本的にはなお鬱陶しいコロナ渦中にあり、容易にはここから脱出できそうにはありません。しかも国外に目をやるとロシアのエゴの塊のようなウクライナ侵攻は止むことなく、清水寺の今年の漢字は「戦」に決まったとか。不安は続きます。また国内における旧世界統一教会と政治の問題は、ようやく一応の結論を出したようですが、まだこれから審議しなければならないことが多く、被害者たる信者二世も納得していません。私たちの置かれているところは、常に「解決のない途中」ということでしょう。

さて、私たちの俳句のことです。12月9日に、今年の最終句会を開催しました。令和4年は12回実施した句会のうち、「新橋ぼる一ん」に集まって、対面しての所謂リアル句会が開かれたのは5回でした。この新しい方式の句会に見る如く、それぞれ自らが選句してきた優秀句を、皆さんの前で声を出して読み上げ披露し、その中から天賞に選んだ句に対する「ひと言」を述べ、討議する句会が、まだまだ改善の余地があるものの、ようやく定着してきています。本句会では下述の通り、全員17名が投句という形で参加、そのうち新橋ぼる一んでの対面しての句会に出席したのは11名でした。

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、
金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、
手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、
森田多佳さん、芦尾白然（17名）。

皆さんが詠まれた句の中から、優れた句として選ばれた今月の優秀句を、下述致しますのでご高覧下さい。前回も申し上げた通り天賞マーク「天」と、多得票賞「☆」とは別に、優秀句に投じられた票数を、月のマーク「㊦」でお知らせしています。併せてご高覧下さい。

兼題1「ポインセチア」

| | | |
|---------------------|----|----|
| ◎『客待ちのポインセチアが正装し』 | 柴楽 | ☆7 |
| ◎『雑踏をポインセチアの鉢抱え』 | 荻女 | ㊦6 |
| ◎『ポインセチア時のやすらぎ流れゆく』 | 清助 | ㊦5 |

兼題2「柚子湯」（傍題＝冬至風呂、柚風呂、冬至湯）

| | | |
|----------------------|-----|------|
| ◎『ちよんと突き浮かせ沈めて柚子湯かな』 | 晶如 | 天3☆9 |
| ◎『傷に沁み心に沁みて冬至風呂』 | 明峰 | 天3㊦8 |
| ◎『貼紙に「本日ゆず湯」庚申湯』 | 歌多音 | 天1㊦3 |
| ◎『湯の中の柚子を弾いて今日を終ふ』 | 白然 | 天1㊦3 |
| ◎『独り湯の柚子湯落とせし夜深かな』 | 栄女 | ㊦7 |
| ◎『鄙の宿柚子湯上がりの地酒かな』 | 傘吉 | ㊦6 |

兼題3「当季雑詠“冬”」

| | | |
|-------------------|----|------|
| ◎『禅寺に暮色の迫る師走かな』 | 蒼樹 | 天4㊦8 |
| ◎『冬銀河ことりと耳石動きけり』 | 荻女 | 天3㊦6 |
| ◎『店仕舞ひしつつ商ふ十二月』 | 明峰 | 天1㊦4 |
| ◎『冬の田に着地脱力熱気球』 | 晶如 | 天1㊦3 |
| ◎『声高く「面！」と園児ら寒稽古』 | 一光 | ☆10 |
| ◎『北風を受け止めて立つ広き胸』 | 多佳 | ㊦3 |

兼題1では、天賞はありませんでしたが、柴楽さんの句「客待ちのポインセチアが正装

し」が、最多得票賞（☆印）を獲得しました。余談になりますが、ポインセチアという季語は、詠み手には手強い季語です。富安風生に「小書窠もポインセチアを得て聖夜」という句がありますが、ポインセチアと聖夜という季語が重なり、何度も読み返す句ではないでしょうか。季語「ポインセチア」が主役になっているか。もう一度、今回、披露された句を読み直されてみたら如何でしょうか。

前置きが長くなりました。先ず柴楽さんの句です。花屋さんで買われるのを待っているポインセチア、そのポインセチアが綺麗な包装紙と、リボンで飾られている景を捉えられました。お見事です。

次に、賞には届きませんでした。高得票を獲得した萩女さんの句「雑踏をポインセチアの鉢抱え」と、清助さんの句「ポインセチア時の安らぎ流れゆく」の二句、いずれも読者の共感を得ました。萩女さんの句は、年末の街の情景を捉え、あるいは「鉢を抱えている」実感を句にし、清助さんの句は、しみじみとポインセチアに見入る師走の書斎での情景、今年も元気に過ごせたという安堵感と感謝の思いにふけり、読者もその安らかな時の流れに共感されたのでしょうか。温かい句です。

兼題2では、晶如さんの句「ちよんと突き浮かせ沈めて柚子湯かな」が、天賞三つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。柚子湯の中で、誰もがチョットやってみる悪戯を捉え、これを句にしました。読んで思わず顔がほころび、笑顔になられたのではないのでしょうか。この句も温かい句です。次に明峰さんの句「傷に沁み心に沁みて冬至風呂」も、天賞三つと高得票を獲得しました。柚子湯であれ、冬至風呂であれ、傷に沁みるのは容易に理解できます。例えば木の枝に肘を引っ掛けた傷、風呂に入って思わず「痛っ」と。ところが、心に沁みるとなると、これは簡単ではありません。人との仲違い、誤解などなど、いろいろな情景を考えます。そして誰しも経験のあることです。この繊細な心の動きに、フットライトをあてられました。読者の心を動かす確かな句になりました。

次に歌多音さんの句「貼紙に『本日ゆず湯』庚申湯」が、天賞一つを獲得しました。この庚申湯というのは、西東京の方なら誰もがご存じの銭湯のようですね。その銭湯のゆず湯の日の情景を句にされました。天賞推挙のコメントとして「昔にはどこにでもあった銭湯の面影が、脳裏に浮かび、こんな風呂屋の柚子湯に入りたいと思った」とありましたが、思わず心誘われました。次に白然の句「湯の中で柚子を弾いて今日を終ふ」も、天賞一つを獲得しました。天賞推挙のコメントの中で「柚子を弾いた動作に安心と喜びを感じる」と、そして、柚子湯に入るという特別の一日「この一年を振り返ったのであろう」と書いて下さいましたが、仰せの通りの気持を詠みました。

次に入賞はしませんでした。高得票を獲得した句は、栄女さんの句「独り湯の柚子湯落とせし夜深かな」と、傘吉さんの句「鄙の宿柚子湯上がりの地酒かな」の二句です。栄女さんの句は「夜遅く自分が入れば、後は誰も入らぬ柚子湯、その火を独りで落とした」という寂しさが、書かずして見事に表現されています。

句会の討議の中では、上五の「独り湯」と中七の「柚子湯」との「湯が重なっていないか」という意見が出ました。上五を「独り入る」か「ひとりなる」として、「湯」を使わないようにすれば・・・との意見がありましたが、如何でしょうか。

傘吉さんの句では「鄙の宿」というのはどんな宿なのかという質問と、「何と言っても下五の地酒が句を締めている」との評がありました。侘しい気持を地酒という喜びで包んだ温かい句になりました。

席題3では、蒼樹さんの句「禅寺に暮色の迫る師走かな」が、天賞四つと高得票を獲得しました。多事多難、心の枯渇を覚える喧噪たる都会の師走、それに引き換え自然界に身を委ねている禅寺の師走は、暮色迫り寂寥感が漂うものの、心を和ませてくれる澄みきった静けさがあります。この情景を見事に十七音に収めた秀句ではないでしょうか。次に萩女さんの句「冬銀河ことりと耳石動きけり」が、天賞三つを獲得しました。内耳の耳石が

動く音さえ聞こえてくるという静寂感。銀河が澄みきった冬の広い夜空に確かな位置を占めている。まさにこの静寂感の表現の妙ととらえたいと思います。天賞推挙のコメントには、耳石がことりと動いた感覚を「あり得ないけれど、素晴らしい表現」とありますが、詠み手は「何度か体験したことのある実感」と言われていました。

次に明峰さんの句「店仕舞ひしつ商ふ十二月」が、天賞一つを獲得しました。商店街の師走の情景を捉えられた一句、商店街のお店の店仕舞いには、読者は幾つものドラマが見えてくるのではないのでしょうか。次に晶如さんの句「冬の田に着地脱力熱気球」も、天賞一つを獲得しました。天賞推挙のコメントには「熱気球を取り上げたのが成功している。しかも刈り入れの済んだ休耕地に力を弱めて着地した情景、人も一年働いた疲れを脱力して休みたい気分が出ている」とありました。

次に天賞は付きませんでした。一光さんの句「声高く『面！』と園児ら寒稽古」が、最多得票賞（☆印）を獲得しました。師走という寒さに向かう季節、子供たちの寒稽古という勇姿を採り上げられました。子供たちの甲高い「面！」の音が、聞こえてくるようです。

もう二句あります。句会の討議の中で、多くの意見を集めた句を紹介します。多佳さんの句「北風を受け止めて立つ広き胸」と、和感さんの句「時雨るるや空車探せど徒歩で着く」ですが、多佳さんの句は「広き胸は誰か」ということになりました。「銅像か、それとも憧れの人か」ということでしたが、筆者は鹿児島島にある西郷隆盛の像を想像しました。討議中、大方の方は「銅像でしょう」との意見でしたが、本当は如何でしょうか。

和感さんの句は「上五、中七は収まっているけれど、下五が・・・」ということでした。この句は、例えば下五を「びしょ濡れに」とか、「絶望す」と推敲されては・・・との「ひと言」でのアドバイスもありましたが、僭越ですが、筆者は次のように推敲されたら如何かと提案します。

「時雨るるや空車来たらず歩く街」或いは「時雨るるや空車来ぬ街歩く街」。

来月は令和5年のスタートです。切磋琢磨、さらに迫力のある句づくりに挑戦しましょう。俳句、とりわけ芭蕉の名句、蕪村の名句について、小説家、評論家竹西寛子さんの著書の中の一文をご披露して擱筆とします。皆さん、どうぞよいお年をお迎え下さい。

「その大方は、ごくふつうの言葉を寄せた十七音の世界なのに、支えているのは無類の秩序であって、喚起力がつねに新しい。それが私にとっての芭蕉の名句、蕪村の名句である。

この易しさならば、ひよっとしたら自分にも、といい気分で誘いに己惚れるのはほんのひととき、句の量が景に終わらず、句の情が情を超えて、遠く遥かなものに及んでいくのを知らされると、恥ずかしくなって、ああ、と思う。・・・」

白然記